

※ 鹿児島県和牛視察に行ってきました。

11/30-12/4 の日程で鹿児島県の和牛事情の視察に行き、2 軒の種畜場と農場、薩摩中央家畜市場のセリを見学してきました。

その中で感じたことを紹介します。

鹿児島の肉牛農家戸数は 13,500 戸で全国1位、ついで宮崎県(10,100 戸)、北海道(2,990)戸の順になります。

飼養頭数は北海道(534,900 頭)について2番目(376,200 頭)、3番目が宮崎県(297,900 頭)です。単純に割り返すと1戸あたり 27.9 頭(北海道…178.9 頭)になり、そのうち 70%の農場が 20 頭以下の飼養規模になっています。

市場へ行って驚いたのですが、話に聞いていたとおり、セリに出す直前まで手塩にかけた牛にブラシをかけていました。また、この薩摩中央市場は隔月で開催されるためか老若男女、一家総出という感じで、平日にもかかわらず子供や女性が引き手になりセリにてて、昼休みには家から持ってきた鍋をガスコンロで温めて、こちらで例えると花見か運動会というような印象でした。

1戸当たりの頭数規模が少ないので此のような事ができるのかと想像しましたが、戻ってきてから鹿児島県出身の大学の先生と話をしたところ「飯を食うにはあれしかないからだよ」と現実的なことを言われ、ただうなづくだけでした。

和牛は血統(三代祖)が重要といわれますが実際にセリをみると最高級の血統(組合せ)でも牛の状態、DG 等によって価格が全く異なり、またその逆もあり、重要なことは生まれてからの飼養管理であることを痛感させられました。

また2軒の種畜場はいずれも民間でしたが、両方ともに地域の農場をとても大切にされていて、優先的に優良精液を地元に還元し、ブランドを一緒になって作っているという一体感には感心させられました。種雄牛管理の責任者(73 才の薩摩隼人)の方が言わされたことで「我々は素牛生産農家、肥育農家、人工授精所と共に良くならなければならぬんだ」ということばがとても印象に残りました。

一人勝ちではなく、関係しているみんなが同じように栄えなければならないということを何度もおっしゃっていました。

酪農と肉牛の差、あるいは規模の大小の差はありますが、基本は一緒だということの再確認をすることができました。



上の写真は、昨年 10 月 15 日に老衰(18 歳 3 ヶ月)で亡くなった、鹿児島県さつま町にある徳重和牛人工授精所の名種雄牛「平茂勝」の銅像で、薩摩中央市場の入り口に展示されています。

「平茂勝」は全国一の産子を誇り、日本の和牛界の発展に大きく貢献した日本一の種雄牛です。1992年に全国畜産共進会で農水大臣賞を射止めて以来、関係者によると、産子は全国で約311,000頭、母牛となった産子は約106,000頭で、いずれも全国一です。先ほども書きましたがこの地域が老若男女、老いも若きも一丸となって和牛生産に取り組んでいる最高の表現というか最高の気持ちが伝わってきました。日本一の酪農地帯である根室にもいつかこのような後生に残せるような形ができればと何度も思いました。



平茂勝号は、平成二年鹿児島県薩摩郡宮之城町（現さつま町）に誕生した。母ふくみ号は気高系の宝勝号を父とする曾於郡の産で、長谷義信氏により当地に導入された。優れた繁殖性に加えて、農業生産法人のざきによつて卓越した産肉性の遺伝的能力をも証明された。父第二十平茂勝は気高号の父娘交配の所産で、種牛性と産肉性を兼備した優良種雄牛として著名であったが、十六才にしてふくみ号の第九子に大輪平茂勝号を後繼に得た。

平茂勝号は地元の徳重学氏によつて、その頗稀な遺伝的能力を育成開花させられ、量質兼備の堂々たる種雄牛として平成四年の第六回大分全共でデビューした。父ゆずりの優れた発育と体積均称と貴賎品位は、本牛を目的とした全国の和牛関係者や審査委員を瞠目せしめ、圧倒的な成績で名誉賞を獲得した。さらに供用開始後の各種検定、枝肉共励会、金共等において、優れた和牛の特性を強力遺伝する抜群の成績を収め、たちまち全国的に圧倒的な名声を博するに至った。

今や産子数は二十五万頭、種雄牛数は三百頭を超える勢いで、地元に高い経済効果を還元しながら、全国各地にあまねく優良和牛遺伝子を供給し、世紀を超える不世出の種雄牛として和牛改良史にその名を刻みつつある。

平茂勝号の顕彰碑建立に当たり、ここに長教の念を以て墓碑を達ねるものである。

今年も残すところ2週間になってしまいました。今年一番の出来事は初の女性獣医師 菅原明日香さんがTHMSに就職したこと、次に太田智亨君がきて授精業務が始まったこと、その次は藤原美穂（旧姓大内）さんが寿退社し森脇三波さんが採用されたこと。それからもう一つ大事な事がありました。佐竹獣医師が副社長に昇格し我が社にも後継者が誕生したことです。この会社の継続が明確な形となつたわけで、決まったときには必ずいぶんと肩の荷がおりたというか、ホッとしたことを思い出します。

毎年、今年は…と反省し、来年こそはと気持ちを新たに…と思っていたのですが、これからはいつもどおりというか、牛歩のように堅実な日々を送るという謙虚な気持ちで新年を迎えたいと思います。

皆さま良いお年をお迎えください。